

世界の子供たちにきれいな水を

NPO日本モリンガ協会 山 和孝
事務局長

[1]はじめに

私たちは今年3月の第3回世界水フォーラムで、毎年数百万人の子供たちが「きれいな水がないこと」によって亡くなっている」問題を超有用樹モリンガの植樹で解決したいと訴えた。

多くの来場者の皆様の共感を得て、このたびNPO日本モリンガ協会を設立して本格的な活動を開始した。

[2]超有用樹「モリンガ」って何？

モリンガは熱帯や亜熱帯に自生している木で、1年に5mにもなる急速成長の木である。土壌もあまり選ばない。ただし、気温が低くなると枯れてしまう。日本では沖縄を除いて冬を越すことが出来ない。

インドが原産で、現在はアフリカから東南アジアまで広く生息しているが、管理された植樹はほとんど出来ていない。

1980年代半ばから欧米諸国で研究が進められ、この木の持っている特色のうち、主に栄養補助食品としてアフリカの国々で、子供たちの栄養失調対策としての国際貢献活動が進んでいる。

[3]超有用樹「モリンガ」の特色

モリンガの葉には栄養素が沢山含まれている。グラム当たりの含有量を比較すると、

- ・ビタミンCがオレンジの7倍、ビタミンAが人参の4倍
- ・カルシウムがミルクの4倍、カリウムがバナナの8倍
- ・タンパク質がミルクの2倍などである。

モリンガの実には食用油として使えるほか、ベンオイルと呼ばれる高級潤滑油として利用できる。その油を搾り取った後の搾り滓を粉末にして、汚い水に投入するとモリンガのタンパク質の凝固作用により水が浄化できる。おまけに、この凝固沈殿物は有機肥料として活用できる。

花や根も漬物、西洋ワサビの代用品として使えるのでほとんど無駄がない。すなわち、ゴミを出さない環境に優しい循環型コミュニティが出来るといえる。

なお、この循環型コミュニティづくりのコンセプトは京都工芸繊維大学大学院の杉林訓夫教授

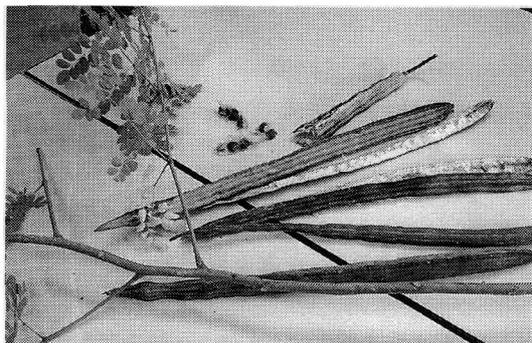
が提唱された。

[4]成功へのインパクト

循環型コミュニティーを実現しようとする、まとまった量のモリンガが必要であり、現在インドネシアやタイで植樹を進めている。

もちろん現地の皆さんも植樹された結果、栄養豊かな食用の葉や食用油、きれいな水が得られるのでそれだけでも意味があるが、本格的な農業という観点から見れば現金収入が得られないのが玉に傷である。

そこで何とか現金収入を得られる道を見つけて植樹を拡大させたいと考え、硫化アルミなどの化学物質を使わない水浄化材として、先進国で使える新用途開発を提携しているNPOのXOクラス女性が京都市の支援を得て進めている。



葉は食用に、実は搾油と水浄化に

[5]今後の取り組みと狙い

8月末にインドネシアで植樹をスタートさせたのを皮切りに、今後タイやカンボジアなど植樹地域の拡大を進めていく。この活動は、京都府の水問題国際賞献事業の一つとして支援をいただいている。

これらの活動を通じモリンガの植樹が世界に広がり、環境にやさしい循環型コミュニティーが開発途上国の貧しい村々に出来て、そこに住む子供たちに栄養豊かな食品を提供することと、きれいな水を飲めるようになることを願って活動を続けていきたい。
(やま かずたか)

「日本モリンガ協会のホームページ」

<http://ksvu.kyoto-sb.ne.jp/xoc/morinagal.htm>